

## 国定国語教科書教材「小さなねぢ」の考察

安直哉

### 一 はじめに

明治元年、「五箇条の御誓文」と同時に「億兆安撫・国威宣揚の宸翰」が渙発された。この宸翰では次のように表現されている。

今般朝政一新の時に膺り天下億兆一人も其處を得ざる時は皆朕が罪なれば<sup>(1)</sup>

天皇親政にあたって、日本国の何人も、その与えられた所があると宣下した。もし与えられた所がないとしたら、天皇自らの責任であると言う。天皇を総家当主として、日本国民皆が役割を与えられるというかたちの国民国家が構想されたのである。

国民皆が然るべき役割を与えられているというのは、理想であろう。その理想をできる限り実現していくことが、社会の安定と国民の幸福につながる。この理想の実現には、社会政策に拠る部分も大きいが、個人の努力と自覚に拠る面も不可欠である。こうした個人の努力と自覚を促す一契機として、教育の果たすところも多分にある。

教材「小さなねぢ」には、役割を得ることの幸福を児童に学んでもらいたいという教科書編纂者の思いが込められていた。

教材「小さなねぢ」は、国定第三期国語教科書(通称、ハナハト読本)、国定第四期国語教科書(通称、サクラ読本)そして戦後の国定第六期国語教科書(通称、みんないいこ読本)と掲載され続けた、長寿教材である。

### 二 「小さなねぢ」の原拠

教材「小さなねぢ」には原拠がある。ロシアのウォルフスキイ(Walhofskii)による創作童話「小さな螺旋」である。邦訳としてはウォルフスキイ著、福永挽歌訳(一九二二)『世界童話傑作叢書 第一編—茶碗の一生—ろしあ童話集—』(日本評論社出版部)がある。同書収録の「小さな螺旋」の梗概を以下に記す。

ある時計屋の仕事台の上には様々な細かい道具が並べられていた。その中には非常に美しい青味を帯びた螺旋があった。その螺旋は鍛えられた鋼でできており、虫眼鏡でなければ見えないほど小さかった。今までは暗い閉ざされた箱の中に横たわっていたが、時計師のカール・イワノウイツチによって取り出されていた。

青い小螺旋は光のもとにさらされて、驚愕をもってあたりを見回した。部屋の至る所にいろいろな種類の大小様々な懐中時計や置時計があった。その中でも小さな螺旋が一番心を惹かれたのは、店の片隅の巨大な硝子箱の中に立っている大時計であった。その大時計は黒い木に彫刻を施した、丸天井のある、印度の寺院の形をしていた。その寺院の内部には、右手に銀の槌を持った魔術使の老人が座っていた。その老人の眼は時計の響きに合わせて絶えず左右に動いていた。その様子は、老人が自分の時の王国に於いてすべてがうまくいっているかどうかを見守っているともいうようであった。小螺旋は、その謎の老人が時間の支配者であって、そこに居るすべての時計は老人に仕えているのに違いないと決めてしまった。

そのうちに不意に大時計がシュウシュウと言いだし、魔術使は静かに

右手の槌を以つて銀の鈴を打ち出した。魔術使は鈴を十回打った。その瞬間、店中の時計が鳴り響いた。十時を打ったのであった。

この様子を見て小螺旋は、時計とは人間に時間を知らせるものであつて、毎日の暮らしに役に立つことが解った。そうした時計の有用性に比べて、自分は小さくつまらない憐れなものに思えて、涙が出るほど悲しくなつた。

その時、カルル・イワノウイツチの小さな男の児と女の児が店に駆け込んできた。子供等は店に入ることを禁止されていたが、イワノウイツチと雇人のエゴールが不在だったので、店の珍しいものを見るために入つてきたのだ。男の児は、仕事台の蓋硝子の上から青い螺旋を取り上げようとした。不意に二人はカルル・イワノウイツチの長靴の音を聞いた。慌てた男の児は、指に摘まんでいた螺旋を床の上に落としてしまつた。

カルル・イワノウイツチは煙草を吸いながら店に入つて来た。カルルは独逸人であつた。露西亜で約三十年暮らしており、財産を拵えたのも露西亜人のお陰であつたが、彼は露西亜人を軽蔑しており、そのため家庭ではいつも独逸語を話していた。

「こら、出て行け！」とカルル・イワノウイツチは厳しく言った。しかし、子供たちの怯えた顔を見て何か間違ひが起きたことを知り、仕事台を調べ始めた。そして青い鋼の螺旋がないことに気づいた。子供達に詰問すると、床の上に落としたことを白状した。

カルル・イワノウイツチは怒つて叫んだ。「お前たちはとんだ事を仕出しましたんだぞ。ああいう螺旋はもうたつた一つしか残つていなかったんだ。だから新たな注文の品をやりかけて延ばさなくちやならん。電信局から持つて来た時計をなおすことが出来ないじゃないか、え？」

「お父さん、あんな小つちやなもの」と女の児は泣きながら言った。腹を立てた時計師は叫んだ。「あの螺旋が小さいから役に立たないとお前たちは思うのか。お前たちには解るまいが、あんな小さいからこそあの螺旋は値があるんだぞ。他の螺旋じゃあの孔に入らないんだ。あれが

なかつたら、機械をくつつけ合わすことが出来ない。お前たちは螺旋を締めないで機械が動くと思つていいのか？解らないか、馬鹿者奴が！」かの小螺旋は仕事台の傍の床の上に横たわつて、この話を嬉しく聴いた。小螺旋は自分が有益なものになりたいと願つていた。自分が極く上等な時計の機械のように役に立つと知つて有頂天になつた。しかし間もなく、見つけてもらえないのではないかと、喜びは怖ろしい不安に変わつた。

カルル・イワノウイツチは子供等に失くなつた螺旋を探させ、雇人もそれを探すために呼んだ。四人が眼を皿にして探したが、螺旋を探しあてることは出来なかつた。哀れな螺旋は落胆した。小螺旋はすべての時計を支配している偉大な魔術使に嘆願した。

「ああ、偉い魔術使様！時の王様！人間の恩人！この私でも何か役に立つと言つてから、あなたはきつとここで私をむざむざ見殺しにはなさらないでしょう。どうか私が見付かるようにお助けください、お助け下さい！」

魔術使は情け深い顔をして哀れな小螺旋をちらと見たが、忽ち右手に持つている槌で鈴を打ちだした。太陽の光は窓を通して魔術使を真直ぐに照らした。魔術使が槌を上げ下げする毎に、日光は槌の滑らかな表面に閃いて、螺旋にあたるように光線を反射した。螺旋は火花のように輝いた。と、カルル・イワノウイツチの娘は嬉しそうに叫んだ。「私が見付けてよ！」

カルル・イワノウイツチは直ぐ小さなピンセットで見付かつた宝物を摘まみ上げ、それを再び蓋硝子の上に載せた。それからカルルは電信局の時計を修理しにかかつた。時計師は小螺旋をピンセットで摘まみ上げ、機械の一部分にある孔へとそれを入れて、細かい小さな螺旋廻しでしっかりと締め上げた。

二週間後、来店した電信局長は、カルル・イワノウイツチに「具合はいいかね？」と聴いた。「ようございます。螺旋がたつた一つ抜けていま

したから、それを入れて置きました。具合がわるかったのはそれがためですよ。」

電信局長は時計の内側の蓋を開けて、かの小螺旋を眺めた。かの青い鋼の小螺旋は、自分の孔に入って「おれも役に立っているんだ！」と愉快げに独り言を言った。(以上、ウオルホーフスキイ著「小さな螺旋」の要約。)

つまり、この童話の前半部分は機械時計工場の描写に割かれている。時計や時間というものが、近代初期までにどのように意識されていたかを次章で確認しておく。

### 三 時間と時計、そして時計師

時計の持つ意味を考察するには、中世まで遡らなければならない。

ヨーロッパ中世の大時計と同じように、これらの驚嘆すべき機械装置では、人を驚かせる効果、あるいは天上の世界を具現化して見せることが、関心の中心であった。<sup>(2)</sup>

大がかりな時計には、「天上の世界を具現化して見せる」という目的が含まれていた。

「近代的な時計技術の最初の手引き書の一つ(一七三八年)の著者である神父アレクサンドルは、<sup>(3)</sup>「イスラム文化とヨーロッパキリスト教文化が直接に接触していたスペインで「星占い師の技術」と数学を徹底して身につけたので、人々は彼を魔法使いとみなしていたという。」<sup>(4)</sup>

時間を指し示す機械時計を操る者は「魔法使い」のように神秘的で畏れ多い存在であった。童話「小さな螺旋」においても、時計屋の仕事部屋の時を仕切っているのは「魔術使の老人」(の人形)であった。

このように、時間には「天上の世界」が反映され、それを指し示す時計は魔術的な神秘性を帯びていた。時計には、畏怖の対象である時間を計時するという、崇高な役割が与えられていた。そうした環境に置かれ

た「小さな螺旋」という前提が、この童話の肝要となっている。

時計および時計師についても、その発生当初から、特別な存在として意識されていた。

十六世紀および十七世紀には、機械としての時計は哲学者や科学者の思索に深い影響を与えた。ケプラーは、「宇宙は神にはではなく、時計に似ている」と主張した。ロバート・ボイルは、宇宙は「巨大な時計仕掛け」であると書き、ケネルム・デイグビー卿も、宇宙は巨大な時計以外の何物でもないと書いている。この機械論的な世界観が優勢な枠組の中では、神は偉大なる時計師として描かれていた。<sup>(5)</sup>

時計師と神が二重写しになっている。つまり「時計師たる神」<sup>(6)</sup>という発想である。そうした発想は、「時間はその存在を時計師に負っている、世界は巨大な時計である、それゆえ世界もまた時計師によって作られた——神という時計師に。」<sup>(7)</sup>という論法を背景に、ヨーロッパ人の意識(無意識)に刻まれていった。

つまり、童話の原作では、神の化身の時計師に仕える「小さな螺旋」という構図が策定されているのである。

時計師の属性について考察を進める。十六世紀フランスの宗教戦争「ユグノー戦争」で、プロテスタントが敗れた。故郷を追われたプロテスタント時計師はスイスなどに移住した。その結果、品質の高い時計がスイスの名産となったということは広く知られている。時計師とプロテスタントは親和性の高い共通属性になっていた。このことは次の引用からも分かる。

時計師の間に行きわたっていた高度な読み書きの能力と、宗教改革運動に従う傾向が比較的高いこととの間には何か関係があったろうと考えることは当然のことである。<sup>(8)</sup>

右引用文でいう「宗教改革運動に従う傾向」とは具体的には「プロテスタントに改宗した時計師」<sup>(9)</sup>を指す。

(3)

ウォルホーフスキイ著「小さな螺旋」に登場する時計師・カルル・イワノウイツチは、「赤い平たい顔をした純粋な獨逸人で、」<sup>(10)</sup>「カルルは自分の家庭ではいつも獨逸語を話してゐた。」<sup>(11)</sup>

ドイツ人といっても信教はさまざまである。しかしマルティン・ルターがドイツ人であることもあり、ドイツ人には相対的にプロテスタントが多い。右引用文からも分かるように、まさにステレオタイプの思い込みではあるものの「時計師IIプロテスタント」という図式が存在した。

「一般に「労働の精神」や「進歩の精神」など、さまざまな名称で呼ばれてきた精神は、プロテスタントイデオロギイによって喚起されたものとされる」<sup>(12)</sup>という定説からも分かるように、原作『茶碗の一生』に掲載されていた「小さな螺旋」は、作品全体を通して終始一貫、「労働の精神」を基調的テーマとしていたのである。

しかし、日本の国定国語教科書に掲載されるにあたっては、前半で表現されている時計師の仕事場で繰り広げられる独特の空間描写などは大幅に削除されてしまった。プロテスタントが持つ「労働の精神」の深奥が、必ずしも日本においては充分には理解されず、そのため、プロテスタントが持つ「労働の精神」の背景として、醸し出されている前半の表現に価値を見出せなかったのである。このため、教科書教材「小さなねぢ」は、同じ「労働の精神」を主題としながらも、原抛の後半部分だけが抽出され、その結果、教訓色のみが強調される一面的な文章表現になってしまった。(もちろん、教科書教材として文章の長さの制限もあったのであろう。)

本教材の持つ右のような欠損も考慮しつつも、次章では、本教材の解釈の諸相を論じていく。

#### 四 ハナハト読本時代の読み方

大正後期から昭和初期に使用された国定国語教科書『尋常小学国語読本』(通称、ハナハト読本)の巻十二第十二課に、この「小さなねぢ」は

掲載された。

三浦喜雄・橋本留喜は、「此の文の主眼點は團體生活、總合機械等の一部分にある個々のものが見、全體の活動に關係なきが如く見えて、實は是非なくてはならぬ重要な位置を占めてゐる場合の好喻であり好例である。」<sup>(13)</sup>と読み解いた。また、「この文章は一面この有機的な社會組織、團體生活中の一個人について考へさせる必要のあるものである。」<sup>(14)</sup>とも言う。日本社会があたかも一人の人体のように、有機的な組織を成しているという発想は、明治から昭和戦中期までの大日本帝国においてたびたび喩えられる発想である。「有機的な社會組織」論においては、組織の一部としてのみ以上に個人が省みられることはほとんどない。

ところで、巻十二という、小学校卒業間近の段階で、この教材が扱われることの意味について、友納友次郎は興味深い指摘をしている。

此の教材が卒業間際の子供に讀ませる讀本に出されたのは非常に意味のあることで、能く教材を味つて戴きましたら、そこに編者の用意のある所か付度されませう。卒業間際の子供には、家庭の貧富に依つて、上級の學校に進む者もあれば、退いて家事に従事しなければならぬやうな境遇の者もありませう。(中略)お友達のあの人やあの人はお家の暮しが好い爲に中學校や高等女學校に入學することが出来るが、自分は家庭が不如意な爲にそれも出来ない。卒業したら直ぐにお父さんの加勢をして田圃で働かなければならぬ、店の手傳ひをしなければならぬ。本當に情ないことだ、詰らないものだと言つたやうな煩悶と焦慮に泣いてゐる子供も尠くないでありませう。それらに對して此の教材がどんな意味を持つてせう。(中略)『俺もやつぱり役に立つてゐるのだ。』といふ此の自信、是がどれだけ強味を彼等の生活に持つものでありませう。慰藉です。慰安です。こうした不遇な子供に對しては、此の教材は大いなる慰藉となり大いなる慰安となるのであります。<sup>(15)</sup>

明治以来の学問による立身出世が色濃く残る時代である。中学校や高

等女学校に進学できなければ、その段階で立身出世からは縁遠い人生を歩むことがほぼ決定づけられる。小学六年生の「煩悶と焦慮」は想像するに余りある。この教材では、そうした「煩悶と焦慮」を慰める、慰藉と慰安の役割が担わされているというのである。高踏的な読み取り方が多い中で、友納の読み方は、児童の心理に寄り添っている。来年には学校を去る多くの子供達の「煩悶と焦慮」を少しでも解消したいという、実に教育者に相応しい意味付けを成している。

その一方で、かなり偏狭で強引な読み方に陥っているという指摘もできよう。この教材はすべての小学六年生に与えられる。その中には、中学校や高等女学校、高等小学校に進学する者も多い。友納の視野にはそうした進学者への考慮が見られない。国定国語教科書は、すべての小学生に読まれるものであり、教師は、児童の境遇如何に関わらず、ある程度普遍的な主題（文意）を探索するべきであろう。その点からも、友納友次郎の読み方は、若干の特殊性を否定できない。

さらに友納の深刻な難点は、安易に教訓的読み方に陥っていることである。八波則吉は別の観点を示しているが、教訓的読み方という点では友納と変わらない。八波は次のように言う。

「小さなねぢ」も、それが無ければ時計は動かないものだど覺りました。「自覺から自尊へ」といふのが私の處世の標語です。(16)

八波の指摘は意味深長である。八波の論理では、「私の處世の標語」のもとで国語教材の文意が規定されていく。敷衍するならば、国語教材の文意はすべて自分の認識・良識の範疇に事前に収まっていることになる。いみじくも国語教師が陥る隘路を語っているに等しい。

大正時代は右のような教訓的読み取りから文芸鑑賞へと発展した時代でもある。その息吹を秋田喜三郎は次のように表現している。

この物語から、自己の職能に満足すべきことや、共同生活の意義等の方面に意味を発見させることは望ましいことであるが、どこまでもねぢの物語を中心として、自然にさうした意味を悟り得るやう

にありたい。意味発見に急なる餘りねぢの物語の味讀が不十分になったり、または功利的見解の意味に陥ったりしてはならぬ。終始一貫、文藝鑑賞の心境に立つて人間味を味はせたいと思ふ。(17)

ただし、この文藝鑑賞の国語教育的方法論については、当時は充分に開発されているとは言えない状況であった。

そうしたなか、垣内松三・齋藤栄治の著作には後の形象論的読み方の萌芽が感じられる。次のように述べている。

ねぢの心持ちに作者自身の自己を見出し、そこに感銘し、作者自身を深く内省させ、その内省が此の文のモーメントになつてゐると見る點から、ねぢの心は作者の心であり、作者の心はねぢの心であると見るべきであります。(18)

ねぢの心に作者の思想を看取するという発想が説かれている。このような教材研究の手法は形象理論そのものと言つても過言ではない。そうした観点のもとで、ねぢの心に沿いながら丁寧に作品を読み解いている。しかし、終盤では次のような文章に到達する。

太陽の光りに照らされ、世にひき出されたねぢは、處を得て、時計の役目を完全に果たすやうにしたことを喜び、自分のやうな小さい身柄でもそれぞれをもつてゐるのだ、形が大きくても、此の小さいねぢ一つなければ、働くことは出来ない、各自共同によつてのみ十全なはたらきを現はすことが出来ると心ひそかに己を省みた心持ちをふくめたのであります。(19)

形象理論に基づく読み方は、ときに新内容主義とか修正内容主義と呼ばれるが、内容重視と批判されるのもこうした点からは頷かれる。

厳原尋常高等小學校の著作は、当時の教材解釈の一つの典型を示している。「小さなねぢ」に関しては、つぎのような理解を示している。

小さなねぢが初めに自分の情ない身に悲んでゐる時、偶然の事變から遂に小げな自分が一團の活動に缺くべからざる重要な使命を有する事に氣付いて満足するまでの刻々の心の變化を十分に讀ま

せなければならぬ。ねぢの話は寓意の存する處で、以て自己の尊貴を自覺しなければならぬ。又社會の組織は必ずしも強い者、大きいものばかりが必要ではなく、外形上小さいものや、弱いものも亦重要な位置を占めてゐることを思はせたい。(20)

この小さな「ねぢの話は寓意の存する處」だと言う。一種の寓話と捉えている。国語科文学教材の多くを寓話として読むという傾向は、近代国語教育の根底に連綿と引き継がれてきた読み方方法論なのである。

一九三一（昭和六）年頃になると、日本は強大な海軍を擁するようになる。このような国情の変化は、教材の読み方にも影響を与えてくる。敵原尋常高等小學校編纂『小學校讀方教授細目』でも次のような表現が見られるようになる。

社會組織の眞相はまさに斯くの如きもので小さなねぢにも比すべき一人の力が團體生活の上に如何に重大なものであるかがうなづかれる。上は司令長官より下は一卒に至るまで皆ほどほどに身を盡してこそ軍艦も其使命を全うすることが出来る。(21)

「小さなねぢ」の話から、軍艦の一水兵へと展開するのは、いささか飛躍がある。軍事国家を支える国民を育てるような言葉の彩が次第に増えてくるのであった。

## 五 サクラ読本時代の読み方

『小学国語読本尋常科用』（通称、サクラ読本）にも巻九第七課として本教材は継続掲載された。読解に大きな変化はないが、小さなねぢに喩される小さな人生への洞察が更に徹底される傾向が見られる。

文部省図書館図書監修官としてサクラ読本編纂に携わった大岡保三は本教材を次のように解説している。

徒らに自己の小なる存在を悲觀するのは、悟らざるの甚だしきもので、人間界の貴賤尊卑は神様の目から見れば大した差異のあるものではない。人間は、ある程度まで自己の環境に安住する事によつて

得られる悦を忘れてはならぬ。(22)

ここで「神様の目」という視点が出てきている。「もと外國の小説からヒントを得て書いた文」(23)と氏自身が言及していることから推察できるように、大岡がロシア童話の原文を読んだうえで発想した観点であろう。

また岩瀬法雲の提示した教材観は興味深い。岩瀬は「指導の発展」として次のように述べている。

最後に、私であれば兒童の前に告白したいと思ふことがある。私も此のねぢと同じやうに我が身をなげいた者であるが、不圖した機縁から良師にお遇ひして、嫌であつた小學教員が嫌でなくなり、其の職分の重大さを教へられて、兎に角今日のやうに心に平和を得たのであるが、兒童に斯うした自覺を強ひる前に、此方から告白する必要がある。此の學年の兒童にはまだねぢのしたやうな、あゝした歎きを持つたことはないであらう。謂はば、泣言を言ふまでのやうな平和なねぢである。それ故、私のしたいと思ふやうな告白をしなれば、本課が一篇の童話の如きものに終る憂があるのである。(24)

ハナハト読本の時のように巻十二に掲載されていたならば、六年生後学期ということで、兒童の進路は分かれば、中学校へ行く者、高等女学校へ行く者その他では、その後の人生に覆い難い差が発生する。人生で最初の進路選択の苦悩に遭遇する者も多かつたであろう。しかし、本教材は易しい文章と判断され、巻十二から巻九に移された。巻九を学ぶ小学校五年生前学期の兒童には、凡人であることの苦悩などまだ切実に体験することはあまり多くはない。そのため「小さなねぢ」の抱いた悩みなどは理解できず、本課はただの「一篇の童話の如きものに終る」のが落ちといったところであろう。岩瀬はそれを鋭く見抜いたからこそ、自分自身の体験を語って、本課の補助を成そうとしたのである。しかし、岩瀬の身の上を語られたところで、兒童はどの程度了解するであろうか。はなはだ疑問である。本教材は、巻十二という小学校（義務教育）卒業

間際に配置されていたからこそ、いやが上にも人生の分かれ道を進まなければならなかった児童にとって適切だったのである。

サクラ読本に再掲されることによって、教材研究も仔細になってきた。國語夜話会の次のような指摘はハナハト読本時代には見られなかったものである。

小さなねちの眼を他から内へ轉向させるに力のあつたものとして、二人の兄弟・日光・陰がある。之等に對して小さなねぢは感謝の意を表すべきで、こゝに人生に於ける運命觀が横はつてゐると見られる。(25)

二人の兄弟によつて、「小さなねぢ」紛失事件が起きたのであるが、その事件がなかったら、「小さなねぢ」は自分の身の上の大切さを知ることがなかった。こうした脇役たちの働きを國語夜話会は、「運命」と位置付けている。人生も、さまざま運命的な出会いや契機によつて開拓されていく。「運命」という鍵概念を導入したところに、國語夜話会の深い洞察が読み取れる。芦田恵之助も「目につくのは、運命とでもいふべきものである。」(26)と同調するのであつた。

そのように教材研究の精緻さは増してきたものの、最終的には、いつの時代もほぼ同じ結論、つまり「人間も自分を知つて與へられたる天地に、眞面目に働くといふ外にはあるまいと思ふ。」(27)という主題に行き着くようである。

勿論、このような教訓的読みのみに終始するものではない。表現の巧みさも多く指摘されることである。宮川菊芳は次のようにまとめている。

此の文は、さうした訓意の外に、たゞ文章として、綴方として見たゞけでも、なかなか優れた點をもつてゐる。たとへば、觀察や描寫が細かいとか、對話が眞にせまつてゐるとか、筋で行かないで肉でいつてゐるとかの點がそれである。だから、さうした點にも氣づかせて、綴方や話方の暗示とし度い。(28)

表現と内容(訓意)との統一は、形象理論を始め、多くの研究で図られてきた。サクラ読本に至り、少しづつではあるがその成果が現れてきたようである。

## 六 まとめ

この「小さなねぢ」は、太平洋戦争敗戦後に作成された最後の国定國語教科書にも掲載された。戦前と戦後の両方の国定國語教科書に掲載された数少ない教材である。その経緯を矢澤邦彦は次のように語っている。

三年の中巻に、「小さなねぢ」がある。これはもとの本からあつた、説明童話である。大變評判がよかつたといふので、生き残つた物語の一つである。社會機構の中で、大事な位置をしめる一つのねじ、うまくいえば、社會の連帶性の説明もできるし、責任感や、自覺の覺醒にもなる。(29)

終戦で日本人は一敗地にまみれた。民意は碎けた。そうした時代の日本に必要なのは「社會の連帶性」だった。「小さなねぢ」から「社會の連帶性」を読み取らせようというのが、矢澤の意図である。

このように、教材「小さなねぢ」は、時代時代の背景によつて、読み取り方を微妙に変えながら、長寿教材として戦後まで生き残つたのであつた。

## 【注】

- (1) 宮内庁(一九六八)『明治天皇紀 第一』吉川弘文館、六五〇頁。
- (2) ゲルハルト・ドールン・ファン・ロッスム著、藤田幸一郎・篠原敏昭・岩波敦子訳(一九九九)『時間の歴史——近代の時間秩序の誕生——』大月書店、二六頁。
- (3) 注2に同じ。四二頁。
- (4) 注2に同じ。四二—四三頁。
- (5) チポラ・C・M、常石敬一訳(一九七七)『時計と文化』みすず書房、

- 一〇一頁。
- (6) オットー・マイヤー著、忠平美幸訳（一九九七）『時計じかけのヨーロッパ』平凡社、五五頁。
- (7) 注6に同じ。五六頁。
- (8) 注5に同じ。五四頁。
- (9) 注5に同じ。五三―五四頁。
- (10) ウオルホーフスキイ著、福永挽歌訳（一九二二）『世界童話傑作叢書 第1編―茶碗の一生…ろしあ童話集―』日本評論社出版部、六八頁。
- (11) 注10に同じ。六九頁。
- (12) マックス・ウェーバー著、中山元訳（二〇一〇）『プロテスタントイイズムの倫理と資本主義の精神』日経BP社、三三三頁。
- (13) 三浦喜雄・橋本留喜（一九二三）『教材精説実際教法…尋常小學國語讀本教授書 第6学年後期用』東京宝文館、一五七頁。
- (14) 注13に同じ。一五七頁。
- (15) 友納友次郎（一九二五）『各課精説 國語讀本の眞使命 卷十二』明治圖書、二四四―二四六頁。
- (16) 八波則吉（一九二四）『第二 國語の講習』教育研究會出版、四二六頁。
- (17) 秋田喜三郎（一九二六）『發展的讀方の實際 尋六』明治圖書、五三六頁。
- (18) 垣内松三・齋藤栄治（一九二六）『國語讀本 讀方教授の理論と實際 卷十二』目黒書店、一七八頁。
- (19) 注18に同じ。一八七頁。
- (20) 厳原尋常高等小學校（一九三二）『小學校讀方教授細目』尋常科第六學年、一三七―一三八頁。
- (21) 注20に同じ。一三六頁。
- (22) 大岡保三（一九三八）『要説』（國語教育學會編『小學國語讀本綜合研究 卷九』岩波書店、六八頁。）

- (23) 注22に同じ。六八頁。
- (24) 岩瀨法雲（一九三八）『指導』（國語教育學會編『小學國語讀本綜合研究 卷九』岩波書店、七五頁）。
- (25) 國語夜話會編（一九三七）『新小學國語讀本指導書 卷九』北海出版社、六六頁。
- (26) 芦田恵之助（一九三七）『小學國語讀本と教壇 卷九』同志同行社、六三頁。
- (27) 注26に同じ。六五頁。
- (28) 宮川菊芳（一九三七）『新制小學國語讀本指導解説並に教授細目 尋常科用 卷九』小学館、一九〇頁。
- (29) 矢澤邦彦（一九四八）『物語の世界』非凡閣、一二九―一三〇頁。

【参考文献】

ウオルホーフスキイ著、福永挽歌訳（一九二二）『世界童話傑作叢書 第1編―茶碗の一生…ろしあ童話集―』（日本評論社出版部）。

※本研究は、JSPS 科研費 JP18K02569 の助成を受けたものである。